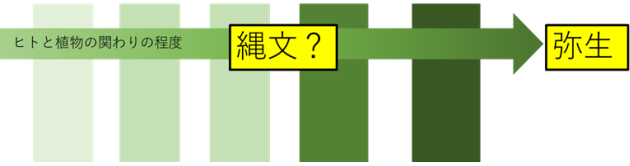


「縄文農耕」はあったか

川崎 花香 小屋 忠士

植物にみられた変化から縄文時代の人々が
どれほど深く植物と関わっていたかを明らかにする。

関
生



～栽培化症候群～

休眠性の喪失

防衛機能の喪失

完熟の同時性

つる性の喪失

種子の大型化

脱粒性の欠如

方法 土器圧痕を用いる

・圧痕の大きさ ・圧痕の表面（ワックスブルーム）

縄文前期・中期両方の土器が出土する堰口遺跡の資料を使用

表1 各資料の個数

時期	(個)
縄文前期	34
縄文中期	14
全体	48

ブルームの有無

ブルームの有無	(個)
ブルームが確認できる	15
ブルームがやや確認できる	14
ブルームが確認できない	12
不明	7

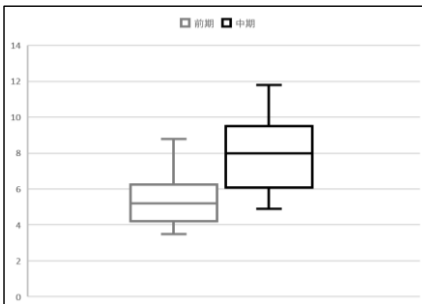


図1 縄文時代前期・中期別の圧痕の全長 (mm)

表2 圧痕の全長の平均値 (mm)

前期	5.3
中期	8.0
全体	6.1

前期から中期にかけ
種子が大型化している

⇒栽培化の可能性大

考察

堰口遺跡には…

・前期～中期にかけた植物の栽培化現象

・種子の大型化とワックスブルームの喪失が

同時に起こった可能性

がある

しかし、現時点でワックスブルームの喪失が
この期間に起こったとは言えない

課題は…

資料の数・具体的な栽培化の進行具合の調べ方

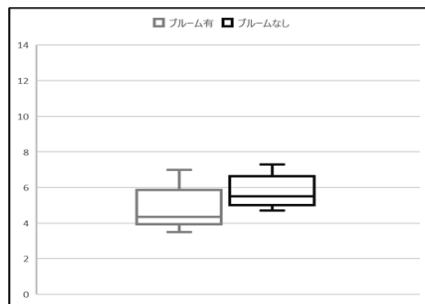


図2 縄文前期 ブルームの有無別の圧痕の全長

表3 前期・中期、ブルームの有無別の
圧痕資料の個数と全長の平均値

個数	(個)
前期の圧痕でブルーム有	18
前期の圧痕でブルームなし	10
中期の圧痕でブルーム有	11
中期の圧痕でブルームなし	2

全長の平均値	(mm)
前期の圧痕でブルーム有	5.2
前期の圧痕でブルームなし	5.8
中期の圧痕でブルーム有	7.7
中期の圧痕でブルームなし	9.2

・**前期**のほうがワックスブルームのない個体が多い

※中期の資料不足の可能性

・ワックスブルームのない個体⇒**大きい**傾向

参考文献

鈴木公雄 (1979) 「縄文時代論」

『日本考古学を学ぶ』 有斐閣

中山誠二・金子直行・佐野隆 (2016)

「越後山遺跡のダイズ属の種子圧痕」『日本考古学会誌』第24号

重田真義 (2009) 「ヒトー植物関係としてのドメスティケーション」

『ドメスティケーションーその民族生物学的研究』